



TITLE:

<書評>下山晴彦編 『教育心理学Ⅱ：
発達と臨床援助の心理学』

AUTHOR(S):

服部, 敬子

CITATION:

服部, 敬子. <書評>下山晴彦編 『教育心理学Ⅱ：発達と臨床援助の心理学』 . 教育方法の探究 1999, 2: 84-88

ISSUE DATE:

1999-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/190222>

RIGHT:

【書評】

下山晴彦編『教育心理学Ⅱ——発達と臨床援助の心理学』

(東京大学出版会、1998年5月発行、350ページ、2900円)

服 部 敬 子

本書は、発達心理学と臨床心理学を別個の異質な領域とは考えず、むしろ「ひとつの事柄の両面として位置づける発達臨床の発想」に基づいて全体の内容構成が行われている。単に両者の研究成果を組み合わせたというのではなく、「生涯発達という時間軸」を基本として、「その過程における発達課題と生じやすい心理障害とそれへの心理臨床援助の方法」を「循環的に記述」する構成となっている。こうした構成は、教育心理学のテキストとしてはきわめて斬新な試みであり、そこには、形式的な章立ての組み替えにとどまらない、人間に向き合う方法上の発想の転換が具現されている。

「社会的存在として時間軸にそって発達する人間」をとらえていく上でキーとなっているのが、「生涯発達」という視点であり、個人の主体的感覚を「物語」として描き出すという方法である。「発達臨床」という専門的にも新しい領域を示しながら、入門のテキストとして本書を手にする学習者(読者)自身が、青年期以前の自己を見直すポイントを得、また、人生後半の展望を得ながら具体的に自己および他者についての理解を深めていけるように真摯な工夫が施されている。

まず、テキストとして魅力的な点としては、① 図表や写真が豊富に盛り込まれている、② 発達関連の重要テーマをまとめた「TOPIC」、心理臨床の理論(技法)モデルをまとめた「COLUMN」、章関係のトピックや具体的な事例が取り上げられている「BOX」の各欄によって内容の充実が図られている、③ 各章末には「引用文献」に加えて「参考文献」が、どういうニーズがある場合に誰のどの本がわかりやすいかといった丁寧な説明とともに掲載されていることなどがあげられる。こうした配慮は、読者が主体的に本書を活用して学習を深めていく上での貴重なガイドになる。

なかでも「COLUMN」欄は、下山氏の編者としての手腕が発揮され、かつ研究姿勢が伝わってくるものとして興味深い。各理論モデルの専門に近い人から集められた基本構想をもとに下山氏が、【中心仮説】【歴史と発展】【基本概念】【心理障害形成に関する説明仮説】【心理援助に関する技法仮説】という共通の形式を与えて再構成するという手続きがとられた。この統一性

によってそれぞれの理論モデルの特徴が非常に分かりやすいものとなっている。また、あくまでも「仮説」として現時点での到達点を紹介するという方法の基盤には、「現実の社会的発達状況にもとづいて心理援助の方法を構成していく」（序章）発達臨床の発想があると考えられる。「それぞれの理論に依存して現実を理解しようとする傾向が強い」（同上）臨床心理学をどう克服していくかという問題意識が貫かれていると言えよう。

次に、発達や教育に関わる専門家にとって刺激的な内容としては、「生涯発達」という視点から発達観を捉え直し、それにふさわしい研究方法の地平を見渡していることがあげられる。

そもそも「発達」の語は、中世、近世の封建制度のもとではほとんど用いられず、文明開化とともに他の諸概念をともなって意味を変えつつ登場してきたというのが、フランスやポルトガル、わが国でも共通の傾向であった（田中,1987）。新しい一千年紀を拓くことをめざして、国際的に The Right to Development が掲げられている今日、やまだ氏が述べているように、近代という時代精神から生まれた「発達」を、今後どう問うていくかが私たちには託されている。ユネスコの21世紀教育国際委員会が21世紀への枢要な鍵の一つとして、「時と場所にかかわらず柔軟性と多様性と可能性とを包含する」（報告書、1996）ものとして「生涯学習の理念を再考」すべきであると提唱していることも関連して、きわめて重要な問題提起であると考ええる。

生涯発達心理学は、人間存在を静的なものではなく、生成・変化プロセスを重視した発生的方法によって、獲得・成長だけではなく、喪失・衰退過程も含めて多面的にとらえる（やまだ, 1995）。そして、生涯発達をみていくには、発達を個人の自我の確立や個人の一生に閉じるのではなく、個人を超える横の広がりとしての社会・文化的視点と、次世代を育み引き継ぐ縦の歴史的視点をもつライフサイクルという大きいパースペクティブが必要とされる（やまだ, 1993, 1995）。この立場から、ヴィゴツキー、Bronfenbrenner、エリクソンらの発達観、発達理論が紹介されている。やまだ氏は、エリクソンの発達図式を「縦糸と横糸が織り合わされた『織物モデル』とみる必要がある」と指摘し、漸成説と呼ばれる観点から、図に表される上下左右の空白部分を埋めながら眺めていく意義を述べている。「生物年齢段階に固定した誰にも通用する単一の普遍的な『発達段階』や、『何歳になったら、何ができる』という年齢標準の記述も見直し」ていく上で必要なのは、「縦／横糸」あるいは「縦／横の広がり」ととらえられる中身について、発達研究で具体的に明らかにすべき事象、およびその方法の問題として議論していくことであろう。このことは、本書が「物語」として人生を理解するという方法をとっている点からも着目に値する。

これまで、科学の分析的論理によって人間の行動を対象化し、能力や機能といった抽象的な単位に分化し、その単位によって人間を理解する発想に基づくといわれる研究方法（浜田, 1993）は、ともすれば、自己の生を展開している時間的存在として「縦軸」をもち、状況との関係の中で生きる関係存在として「横軸」をもつ人間のあり方を分断してきた。その反省に立って、この両軸の交わるところに生起する人生の多様な事象を、因果関係ではない一次元の順序として表現

するのが「物語」としての理解、アプローチであると考えることができる。

人間を単独でみるのではなく生態学的に幾重もの「入れ子システム」の中で生きている存在としてアプローチする1つの代表がBronfenbrennerの生態学的発達理論である。また、エリクソンは、個人の行動や感情を理解するには、そこに働いている不可分の3つの過程（生理学的過程、心理学的過程、社会・文化的文脈）を考慮しなければならないと主張した。一人一人のその時どきの発達像を物語として理解していく上でこれらの視点はきわめて重要な示唆を与えるものである。しかし、そのように社会的関係の中から浮かび上がらせた多様な個性的な人間存在の物語を、次には関係存在のもとに位置づけ直していく作業が必要であろう。多様な個性的記述が、他の人間存在のあり方から切り離された「特殊」なものとしてみとめることのないように。このことは、Baltes (1983) が生涯発達をとらえる視点としてあげた発達の3要因；① 年齢段階をもとにした一般的発達、② 歴史段階的コホート(同期集団)のもつ特有性、③ 非規範的個人特有現象(個人差)のうちの第1の要因の様相を明らかにする作業に関わるものである。

ここで追究されるべき「一般的発達」は、「量的増大としての成長といった、高い有効性の実現へと単純に向かう過程ではない」(Baltes, 1987)。その時どきの過程において、歴史的文化的な諸条件に規定されつつ、個体のどのような多様性が発現しうるのであるのか。他の2つの要因からは相対的に独立したものとして①の要因の様相を描いていくためには、人間発達における「縦軸」と「横軸」とをかねそなえたカテゴリーが必要であると考えられる。

このようなカテゴリーとしては、1人の子どもを対象とする日誌研究を通して10年余前にやまだ氏によって吟味された「3項関係の形成」(やまだ, 1987) が1つの例としてあげられるだろう。0歳後半の乳児がどのように「人の世界」と「物の世界」を結びつけていくのかが、まさに「縦系」と「横系」を駆使して編まれた分厚い記述によってその形成過程が描き出され、先行研究との連関に基づく限定のもとに説明された用語である。この用語は「一般的な関係づけのルールへと導くことを可能にする」が、「それが適用される文脈を無視して」抽象化するのではなく、「具体的な文脈や微妙な行動内容の違いを明確にする方向」へと研究をすすめることが必要であると述べられている。例えば、自閉症児は「クレール現象」と呼ばれる行動で3つの項の関係づけを行うが、実用的な文脈でしか関係づけにくいと、ことばへとひらかれていきにくいという制約をもつ。このように、微妙な内容の違いを明確にしつつ理論構成のカテゴリーを抽出していくという方法によって、自閉症の子どもの「特殊性」が一般の人間発達の様相から切り離されることなく人間存在の「多様な」あり方の1つとして物語ることが可能になる。そして、こうした捉え方こそが、「発達臨床」の発想にもとづく発達援助の方法を追究していくことを可能にすると考えられる。

下山氏も述べているように、心理学は、歴史的に物理学や生理学といった自然科学をモデルとして発展してきた。統制された特殊な条件下で複雑な事象をできるだけ単純化し、原因－結果のリニアな因果関係の法則を見出していくという、いわばニュートン力学的なアプローチによる

研究には確かに限界がある。社会的な関係の中で、偶然的に多様に現れる人間の時間的な変化プロセスを克明に描き出そうとする生涯発達心理学は、物理学との関係で言えば歴史上の画期的な転換となった量子力学の方法に共通性を見出すことができると私は思う。それは、量子力学が、自然は「現存在」と「本質」という2つのレベル；二重構造をもつこと、現象としては偶然的・確率的にしか起こらない「出来事」の背後にあってそれを規定している「相互作用」を見出したことによる。つまり、自然には実際に「根源的な偶然性」(町田, 1994)があり、現在の状態が十分分かっていても、将来とり得る状態にはいろいろな可能性があるという新たな認識が必要になったのである。しかし、こうした偶然性は予測が不可能であることを意味しない。考察する対象を決めた時、それらの可能性の総体を表す波動関数によって、どのような現象がどのような確率で起こるかは必然的に決定される。

上述の「3項関係」の形成を例としてこの量子力学における「出来事」と「相互作用」、発達の物語的叙述における「縦糸」と「横糸」との関係の説明するならば次のようになるであろう。すなわち、「3項関係」を形成する力は、生理的な基盤と社会的な諸関係の相互作用によってその子どもにとって必然的な「縦糸」として培われてくる。しかし、感動を分かち合う他者、あるいは、媒介する物といった場面のコンテクストとしての「横糸」がなければ、興味ある物を指さして示したり、「泣き」を手段として意図的に用いるといった行動は現れようがない。どのような「横糸」が条件としてととのえられた時にその子どもの「縦糸」がどのように発現するのか。横糸と縦糸の交わるところに立ち現れる行動について、現象と本質という2つのレベルでカテゴリーを創出し理論化していくことが、心理援助を「その人の生きている関係の援助」であると考える発達臨床において重要な役割を果たしていくと考える。

最後になったが、心理援助は「個人の援助とともにその人が生きている社会組織(システム)を介しての援助を重視する」という序章での言明が、他の章においてももしっかり受けとめられている点を評価したい。「児童期・思春期の発達」の章では、制度面で高校改革がどのように進んでいるかについてふれられ、「老年期の発達と臨床援助」の章では、老人介護の実態と高齢者対策の問題が取り上げられている。これまでの臨床心理学のテキストでは、こうした社会的な制度や政策面の実態が看過されていたように思う。ブロンフェン布伦ナーもエクソシステムの中にあげて着目している「法的サービス」や「社会福祉サービス」という「横糸」の有り様が、いかに社会的関係存在としての人間の「縦糸」に生起するもつれを解きほぐし、再び紡いでいくことを援助し得ているのか、その仕事に関わる人たちの「横糸」を断ち切ることになってはいないか、といった視点の重要性が本書からは浮かび上がってくる。

引用文献

- Baltes, P. B. 1983 Life-span developmental psychology : Observations on history and theory revisited. In R.M.Lerner, *Developmental psychology : Historical and philosophical*

- perspectives.* Lewrence Erlbaum Associates, 79-111.
- Baltes, P. B. 1987 Theoretical propositions of Life-span developmental psychology : On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23, 611-626. 東洋・
- 柏木恵子・高橋恵子（監訳） 1993 生涯発達心理学Ⅰ. 新曜社.
- 浜田寿美男 1993 発達心理学再考のための序説. ミネルヴァ書房.
- 町田茂 1994 量子力学の反乱——自然は実在するか？. 学習研究社, 25.
- 田中昌人 1987 人間発達の理論. 青木書店.
- UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century 1996
LEARNING : THE TREASURE WITHIN. 天城勲（監訳） ユネスコ「21世紀教育国際委員会」
 報告書——学習：秘められた宝. ぎょうせい.
- やまだようこ 1987 ことばの前のことば. 新曜社.
- やまだようこ 1993 人生半ばに生きる. 発達, ミネルヴァ書房, 54, 20-28.
- やまだようこ 1995 生涯発達をとらえるモデル. 無藤 隆・やまだようこ（編） 生涯発達心理学とは何か. 金子書房, 57-92.

本書の構成		
はしがき	序章 :発達臨床の発想	
第1章:生涯発達	第2章:乳幼児期の発達	第3章:発達障害とその臨床的援助
第4章:児童期・思春期の発達	第5章:児童期・思春期の心理障害 と臨床援助	第6章:学校臨床
第7章:青年期の発達	第8章:青年期の心理障害と臨床援助	第9章:学生相談
第10章:成人期の発達	第11章:家族臨床	第12章:老年期の発達と臨床援助
人名索引／事項索引		

（日本学術振興会特別研究員）